

開催地名：和歌山県紀の川市	
開催日時	令和4年9月1日（木） 13：30 ～ 15：00
開催場所	紀の川市役所
語り部	伊藤 正治 （岩手県大槌町）
参加者	紀の川市立小中学校校長または教頭・教育総務課職員・危機管理課職員 30名
開催経緯	<p>災害時には小・中学校教職員として、児童・生徒を守るための行動は本能的にとれるが、避難所として訪れる地域住民の対応や施設の管理・運営については、ある程度の想像と認識はあるものの、実際の災害発生時に、施設管理者側（学校）として協力を求められるものが、どのような内容なのか認識が薄く、対応に右往左往することが想定される。今回の語り部講演では、避難所施設管理者（教職員等）としての実体験、実際に避難所となった際、考えておくべき対応についてお話いただければと考えている。</p>
内容	<p>（１）はじめに</p> <p>大槌町はリアス式である三陸海岸のほぼ中央に位置し、古くから豊かな海の資源に恵まれ、それを各時代ですましく活用してきた歴史がある。</p> <p>平成23年3月11日の午後2時46分に発生した地震により、大槌町では津波が発生し、死者822人、行方不明者413人、関連死51人の合計1,286人の犠牲者がでた。これは人口の8%に達するもので、海に向かって拓けていった町であるため、津波には弱い構造だったことが要因と言える。また、平地は町の面積の2%に過ぎないが、そこに町の人口の8割の人々が住んでいたことも被害を大きくした要因であった。浸水面積は住宅地で52%に及び、町の機能が消滅してしまった。</p> <p>町の職員についても、臨時職員を含む136人のうち40人が犠牲となり、町内の小中学校7校のうち、5校が震災で使用できなくなった。年度末だったこともあり、新年度に向けた教科書をはじめとする教材がすでに到着していたが、すべて使えなくなってしまった。さらには、避難所となった公民館の暗幕は寒さ対策のために手の届く範囲で切り取られたり、町内の学校では、ピアノの鍵盤の上に置いてあるフェルトも切り取って焚き付けに使われ、理科室のアルコールランプも暖を取るために利用された。</p> <p>（２）発災当日からの対応</p> <p>個人宅の避難所を含めると、約100箇所の避難所に約6,000人の町民が避難した。避難所での避難生活は最長で8月11日まで続いた。</p> <p>当面は、災害対策本部の業務に当たる職員を除いた職員90人ほどを3班編制として対応した。災害対策本部では毎日6時と18時に関係機関調整会議を開き、情報の共有に努めた。その他食料物資班、避難所対応班、遺体収容班を設置して業務を進めたが、救助活動や物資の移動のための道路の確保が進み、新たなニーズへの対応や改善が必要となってきたことから、これらに加えて新たに救護班、清掃班、工務班及び水道班を設置した。また、本部機能の充実や遺体火葬に係る証明書の発行等、本来業務の遂行の</p>

ため避難所に配置していた職員を引き上げ、避難所運営についても改善を図るよう協議・指導を行った。

(3) 学校再開と防災教育

教職員は、自らも被災して避難所で寝起きしながら、安否不明の児童生徒の情報の入手、卒業式などの年度末対応、心のケアの必要な児童生徒や保護者の把握、学校再開に向けて必要な物品の把握や手配に不眠不休で取り組んだ。早く学校を再開してほしいというみんなの思いを受けて、4月20日の学校再開と4月26日の新年度入学式を決めた。その結果、小学校については、被災した4校のうち3校は被災を免れた小学校で、残る1校は隣町にある県の生涯学習施設で再開した。中学校については、1、2年生は被災を免れた中学校で、3年生は町内にある県立高校の空き教室を借りて再開することができた。

今年、小学校の4年生と5年生の一部は震災津波後に生まれた子供たちである。100年後には直接体験した人は誰もいなくなってしまう。防災教育の重要な要素は「語り継ぐ」ことである。語り継ぐことが次の災害への備えを促し、災害に強い社会を構築することにつながり、少しでも多くの命を救うことになる。そして、語り継いでいくことで、災害に対する地域文化・伝統が形成されるはずだ。私を含め、決して絶やすことのないよう、継続して取り組んでいきたいと思う。



開催地より

東日本大震災を経験された語り部から、避難所施設管理者（教職員等）としての実体験、実際に避難所となった際考えておくべき対応について、お話いただいた。今日のお話しを受けて、今後は各校の危機管理意識の向上、児童生徒の安全を守るための各校での備えについての検討、防災・減災教育と防災研修の実施に取り組んでいきたいと思う。